



撮影・堀田力丸

一般に作曲とは「音の高さ」を操作することだと考えられている。しかし、21世紀に入つてから顕著なのは、ノイズまで含めたさまざまな「音色」を、疾走するリズムのうえで跋扈させる傾向だ。ここではドなのか、しなのかよりも、シュワシュワなのかザクザクなのかといった、音の肌触りこそが問題になる。

ギター1本による高速の連打音が、雜音をまき散らしながら変化してゆくシモン・ステーン＝アナー・セン「ウイズイン・ア・マングスト」は、まさにその典型だろう。続く増田建太、ユグ・K・マルコヴ

た。

一般に作曲とは「音の高さ」を操作することだと考えられている。しかし、21世紀に入つてから顕著なのは、ノイズまで含めたさまざまな「音色」を、疾走するリズムのうえで跋扈させる傾向だ。ここではドなのか、しなのかよりも、シュワシュワなのかザクザクなのかといった、音の肌触りこそが問題になる。

ISCM “世界音楽の日々、100周年記念コンサート

イット、フランチェスコ・フリディイらの作品も、ざつくりいえば同様の趣向。ポップスにも似た時間感覚を備えた、切つ先の尖った音楽である。

やはり恐ろしいほどのスピードで多彩なノイズを響かせるフランク・ベドロ・シアン作品では、サクソフォンの大石将紀＝写真＝が凄絶な演奏を展開。曲と一体化した姿は、まるで舞台のうえに、ひとつ細長い音響体があらわれたようでもあった。

逆に、こうした曲が大半だったからこそ、サックスクとピアノが調和と不調和のあいだを揺れ動く徳永崇作品のユーモア、そしてチェロの倍音の美しさをそのまま提示したカイヤ・サーリアホ作品のしなやかさを十全に味わえたようにも思う。

最大の功労者は、互助会的な平等主義に陥りがちな「作曲家団体の主催する演奏会」において、新鮮な選曲を実現した同協会国際部長の福井とも子。この口のようになって抜かれたキュレーションを多くの企画が見習ってくれれば、現代音楽は変わる。

（音楽評論家・沼野雄司）

—7日、初台・東京オペラシティ・リサイタルホール。

評

先鋭と調和 新鮮な選曲